

●特別賞〔論文概要紹介〕

知的障害児に国際 コミュニケーション力を 育む英語活動の実践

東京都江戸川区立二之江小学校

こばやししょうぞう
小林省三

【実践の概要】

特別支援学級（知的障害）で広汎性発達障害（高機能自閉症、自閉症）やダウン症などの障害を抱える児童の自立活動を手厚く支援している。平成19年7月から毎週1回、JTE（日本人英語講師）と担任、校長が連携して、英語活動を通し積極的なコミュニケーション力を培う試みを行ってきた。本稿では平成19年7月から平成21年3月までの2年弱の実践から、知的障害児への国際コミュニケーション力の素地の育みを報告したい。

【論文内容の紹介】

1. 研究の目的

国際コミュニケーション力の素地としての「共生」「自己決定行動」「主体性」を身につけさせるため、英語活動で培いたい資質・能力を明確にし、高めていこうと考えた。その育みは「生きる力」と同心円となる。

英語活動で培いたい資質・能力とは…

（※道徳性の育みでもある○が重点項目）

- 「共生」につながる： ○広い視野（異文化理解）、○思いやりの心（相互理解）、○明るい心、○豊かな心
- 「自己決定行動」につながる： ○積極的・意欲的な心、・自己表現力
- 「主体性」につながる： ○自己コントロール、・自己の確立

2. 指導の実際

JTEをT1として、全て英語による活動とした。担任（4名）、講師（1名）、介助員（3名）、小林はT2として、児童一人一人に英語と日本語によるコミュニケーション上の支援をした。評価観点・規準項目をたてて毎時間記録し、児童の変容を注視した。

年間活動計画は生活に身近で、積極的にコミュニケーションを図りたくなるようなテーマやトピックを選択した。「あいさつ」「お元気ですか?」「数で遊ぼう」等である。

活動1年目は英語音声に親しむことを主眼とした。児童らは英語の歌やチャンツを好み、体全体で生き生きと自己表現した。記憶力にも優れ、単語や平易なセンテンスをすぐに表出する児童もいた。

2年目、コミュニケーション体験活動を重視するために単元を絞った。中でも「買い物」は児童のお気に入りでもあり繰り返し行った。客と店員の英語コミュニケーション活動を通して社会性を育むようにした。

また、英語活動での取り組みをほかの授業、行事（学芸会、音楽会等）にも生かすことにより、自尊感情から自信にあふれ、積極性が培われるようになった。

3. 成果と課題

障害別変容の傾向をつかむため、広汎性発達障害（3事例）、ダウン症児（2事例）の変容に着眼した。結果、5事例とも、①英語活動に関心をもち進んで参加し、JTEや担任、友達からの働きかけに応じ、積極的にかかわっている（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）。②JTEのしぐさや音声を真似、身振りや言葉で応じている（コミュニケーション能力）。③英語の音声や外国の音楽に親しみながら、楽しく歌ったり踊ったりしている（言葉や文化への関心・意欲・態度）ことが判明した。

そして、日常生活では、明るく振舞い、相手

を思いやり、自らを律し進んで行おうとする姿勢が見受けられるようになった。

こうした育みは「共生」「自己決定行動」「主体性」につながり、本実践の目的である国際コミュニケーション力の素地への芽生えでもある。

課題として、LD、ADHD等を含めた児童に新たな教授法の開発を行うため、障害児の心理に学び、脳科学の分野における分析と解明も進められなくてはならない。

●奨励賞【論文概要紹介】

**ADHDと共に生きる
～支え合い育ち合う
学級づくりをめざして～**

大阪市立森之宮小学校

あきやま れい こ
秋山麗子

1. はじめに

ADHDをもつAが入学してからの2年間の取り組みの日々を振り返り、特別支援教育の在り方と、特別活動を主軸にした支え合い育ち合う学級づくりについて考察した。

2. Aに対する支援・指導・配慮

Aの指導については、「集団の中で自分の行動を決定し、みんなと共に生活する力をつける。」「自尊感情を高めていくことで、現実逃避をせず、自分の力を伸ばそうとする気持ちを育てる。」の2点をめざして取り組んだ。

(1) 行動療法を取り入れる

① がんばりカードとがんばったねシール

Aと過ごした2年間で4期にわけ、それぞれの時期のAに合ったがんばりカードを作成した。

がんばりカード 月 日 ()

きょうは、何てんとれるかな？
2=たいへんよくがんばりました。 1=がんばりました。 0=つぎはがんばりましょう。

	あさ～	20分休み～	きゆう食～
じゆぎよう中しゆう中する。	0 1 2	0 1 2	0 1 2
友だちとなかよくすごせる。	0 1 2	0 1 2	0 1 2
ルールをまもって生活する。	0 1 2	0 1 2	0 1 2

きょうのてん数 = てん
先生より おうちの人より

8点でこぼろひ

【第4期 2年生2学期～3学期】

② 反省タイム

あらかじめ話し合った上で、してはいけない行動を決めておき、そのような行動が見られたときは、決められたすに一定時間座って自分の行動を振り返るようにした。

(2) 日々の生活での配慮

その他、日常の学校生活において、次のように共通理解を図り、学校全体で取り組んだ。

- ①積極的な無視・配慮ある無関心
- ②衝動性を事故につなげないようにする
- ③刺激を最小限に統制する

(3) 保護者との連携

我が子の様子をなかなか受け入れられない母親と向き合い、寄り添い励まし続けることで、学校と家庭が同じ方向を向いて取り組めるようになり、指導の成果を上げることができた。

3. Aを支える学級づくり

(1) 学級づくりの実際

① 学級目標を明らかにする

学級としてめざす方向をきちんと決め、みんなで共有することは、自己統制をしにくいAにとって、学級で共に生活するための大切な外的環境の調整となった。

② 話し合いの方法を指導し、問題を話し合いで解決する

きまりやルールを守ろうとする意識や、きまりを守れなかったときは、お互いに注意し合える雰囲気、さらに、一人一人がよいところをお互いに見つけ合えること、学級のだれでもがこの学級に安心して存在してよいことを認め合える、といった力が児童に育っていった。

③ 役割を分担し、活動に取り組む

当番活動を明確にしたり、係の活動を積極的に
行うようにしたりした。自分もみんなの役に立
つ仕事ができるという実感は、Aの成功体験と
なり、自分の仕事を進んでやり遂げようという積
極性が身についていった。

④ お誕生会の計画

Aにとって、集団遊びの経験はソーシャルスキ
ル育成の観点から、とても有効である。Aの誕
生月には、Aはうれしそうにじっと立って歌を歌
い、自分が主役でないときは、みんなと一緒に
友達を祝っていた。

4. 最後に

ADHD児のように、学級の中で特別な支援が
必要な子どもを支える学級づくりでは、集団育
成の基本を、一つ一つ丁寧に大切に指導してい
くこと、即ち「特別活動を主軸にした学級づくり」
が、今求められる「人間関係形成力」を育てる
教育であり、「特別支援教育」の在り方の基本で
もあると考え、今後も考察を深めたい。Aと共
に過ごした2年間を振り返ったとき、障害児を支
え、共に生きる教育を実現することが、すべて
の子どもたちを大切に教育であることを、改
めて強く心に刻むのである。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

子ども達の考える力・ 表現する力をつける ノート指導

石川県加賀市立錦城小学校

かもやみわこ
釜親美和子

【実践の内容】

よいノートが書けるようになれば、子ども達の
思考力・判断力・表現力を高めていけるのでは
ないかと考え、ノート指導に取り組んだ。課題
のつかみ方、見通しの立て方、自力解決の表現
の仕方、友達からの学びの記録、そして学習の
まとめまで、授業全体を通してノートの書き方を
指導した。

【論文内容の紹介】

1. 論文の概要

(1) 書くことの大切さを伝える

ア. 最初の授業で、よいノートを書く目的と教師
の願いを明確に伝える。

「自分の学習の貴重な記録」

「世界にたった一つのノート」

イ. ノートに書く内容を伝える。

課題、見通し、自分の考え、友達の考え、
まとめ等。

カラーペンの活用や吹き出し、ノートのマス
の利用等テクニックも伝える。

ウ. 書くことの大切さを繰り返し伝え続ける工夫。

(2) 子ども達が苦勞して書いた「ノート」には 敬意を込めてコメントを返す

ア. 形を整えるのは最初の一步。

内容を充実させるためのコメント。

イ. 書く意欲を持続させるためのコメント。

ウ. 意欲を維持させ、内容を高めるための小さな工夫。

「誉めること」「方向を示してやること」

(3) ノート指導は長期戦、無理はしない
柔軟に、でも継続させて。

(4) まとめは子ども自身の力で書かせよう

ア. 多くの情報の中から必要な事柄を判断し、筋道を立てて推論し、言葉を駆使して表現する。その継続が力をつける。

イ. そのためにスモールステップで。

①途中まで教師が書いてからその続きを

②キーワードを示して

③課題を示して今日の学習を振り返って

(5) どうしても書けない子には、よい見本を示してやる

ア. 「何を書けばよいのか」「どんな書き方をすればよいのか」例と理由を示す。

イ. よく書かれているノートをコピーして、一人一人のノートに直接はりつける。

2. 成果

(1) よい内容のノートを書く子が増えた

根気よく継続していくことで、

(ア)振り返りができるノート

(イ)考えが残るノート

(ウ)思考が整理され、自信を与えるノート

(エ)間違いをその理由を示して訂正してあるノート

(オ)学びに深まりが見られるノート

等、子ども達のノートに明らかな変化が見られるようになった。

(2) 子どものノートは、指導記録でもある

ノートは、子ども達の学びの記録であると同時に教師の指導の記録でもある。ノート指導の充実は、自らの指導の有効な反省資料となる。

3. 課題

子ども達が自ら動く(考えたい、書きたい、言いたい)授業ができれば、子ども達の活用する力はもっともっと伸びるであろう。子ども達が解かずにはいられなくなるような、課題提示のできる授業が次の課題である。

●奨励賞【論文概要紹介】

子どもの興味関心に 沿いながら、ともに 作っていく授業

—6年「電気をつくって使ってみよう」—

奈良県生駒市立生駒東小学校 なみこしかずひろ
(前・奈良県生駒市立生駒台小学校) **浪越一浩**

I. はじめに

奈良県小学校理科教育研究会では、子どもたちの思考力をつけるため、問題解決学習を基本とした理科教育の研究を行っている。平成20年の学習指導要領改訂で重視されている、「科学への関心を高めること、実感を伴った理解を図ること、科学的な思考力・表現力を育成すること」などをふまえ、1年間理科教育の実践を行った。

II. 単元「電気をつくって使ってみよう」

III. 授業仮説

- ① 手回し発電機やモーター、ブザー、電熱線、コンデンサなど、たくさんの教具を用意し、さまざまな現象に出合わせることで、児童の興味関心を高めていく。
- ② 手回し発電機と豆電球を使い、条件を変えながら実験を進めることで、電気の量を視覚的にとらえられるようにする。
- ③ まだわからないことや、もっと調べたいことなどの感想を書かせ、次時の課題を子どもたちとともに作っていくようにする。
- ④ 児童の思考がどのように連続していくかを考え、児童の興味関心に沿った単元展開を考える。
- ⑤ 学習展開は、課題→予想→実験→結果→考察→感想とし、結果をまとめる際には、表やグラフ・図などを入れ、さらに、考察では

課題や予想と結果を照らし合わせながら考えさせるようにする。

IV. 実践内容

1 手回し発電機を使って電気をつくろう

<結果>

	豆電球	モーター	ブザー	手回し発電機
おそく	暗い	おそい	小さい	おそい
はやく	明るい あつい	はやい あつい	大きい	はやい
逆回し	同じ	逆回り	鳴らない	逆回り

<考察・感想>

- ・今日の実験から、何かを回すことによって電気は作られるとわかった。また、電気とは、ものを動かすものの源で、エネルギーのようなものだと思う。作った電気をためて、どれくらい使えるのか調べたい。

2 コンデンサに電気をためよう

① コンデンサに電気をためよう

<結果>

- ・手回し発電機の回転数を多くすると、豆電球が長く光った。手回し発電機を速く回してためると、豆電球が明るく光った。

<考察・感想>

- ・コンデンサには電気をためることができて、ためた電気を使えることがわかった。
- ・手回し発電機の回転させた数が秒数と関係していることがわかった。たくさんためたい。ためられる量に限界があるのか調べたい。

② コンデンサにたくさん電気をためよう

●手回し発電機の回転速度を変えよう

変える条件…回転速度(1回/sと2回/s)

変えない条件…回転数

<結果>

回転速度が速い方が、豆電球が長く光った。

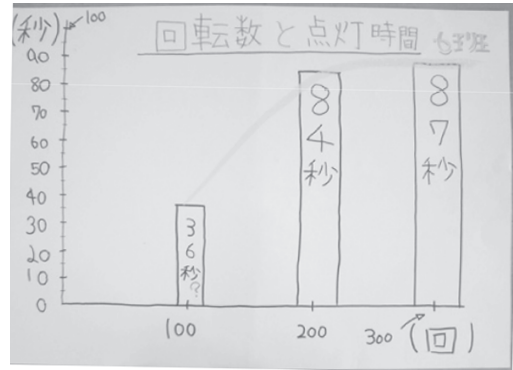
<考察・感想>

- ・回転速度が速いとたくさん電気がたまることがわかった。点灯時間と速さは比例しないこ

とがわかった。

●回転数を増やそう

<結果>



変える条件：回転数

変えない条件：回転速度

<考察・感想>

- ・回す回数と点灯時間は比例しない。
- ・回数が多くなるほど電気がたまりにくい。
- ・手回し発電機を回す手ごたえが軽くなったのは、200回ぐらいで電気のたまる限界がきたからだと思う。回数を増やすと光る時間だけでなく、光の強さも変わった。

3 ニクロム線に電気を流そう

<結果>

結果①	1	2	3	4	5
予想	少し出る	たくさん出る	///	///	///
実験中	長い方が 切りやすい、 熱くから見え るほど熱い出 るよ。ニクロ ム線が切れた。	長い方が か切りに くい。時間 がかかる。	///	///	///
気づいたこと	長い方が 熱くから見え るほど熱い出 るよ。ニクロ ム線が切れた。	長い方が か切りに くい。時間 がかかる。	///	///	///
結果	たくさん出る	少し出る	///	///	///

<考察>

- ・ニクロム線の長さを替えると、短いほうが、発泡スチロールがより早く切れることがわかった。
- ・太さを替えると、太いほうがより速く切れることがわかった。これは、太くて短いほうが一気に電気が出たからだと思う。

4 普段使っている電気

「発電機の仕組み」や、「発電所の仕組み」などのビデオを見て学習を進めた。

5 発展学習

コンデンサを使ったおもちゃの設計図作成

V. まとめ（仮説についての考察）

- ・ 導入段階でさまざまな電気素子に出合わせることで、電気は光、熱、動力、音などのエネルギーに変換されて身近に使われていることを、理解させることができた。
- ・ 手回し発電機の回転数を変えたり、速さを変えたりしながら実験を進めていた。豆電球の点灯時間や明るさに注目することで、自分たちで手回し発電機やコンデンサの特性を見つけ、課題を設定することができた。
- ・ 表やグラフ・文にまとめることに、抵抗を感じている子どももいたが、他教科でも書く機会をたくさん設けたため、書き出しで戸惑う子どもが少なくなった。また、図や表を見やすい大きさで書いたり、接続語を使いながら文章にまとめたりすることができるようになった。

